

令和6年度 新型インフルエンザ等対応訓練事例集

事例 1	世田谷区	情報伝達訓練、患者移送の実働訓練	（感染症診療協力医療機関、民間救急、保健所）	※ブロック訓練
事例 2	墨田区	講義、検体採取訓練、情報伝達訓練	（感染症診療協力医療機関、保健所）	※ブロック訓練

事例-1 令和6年度新型インフルエンザ患者発生時対応訓練(世田谷区)【ブロック訓練】

訓練概要

1 訓練の日時・場所・実施機関

(1) 日時

令和6年12月5日(木曜日)午前10時から午後4時まで

(2) 場所

感染症指定医療機関(自衛隊中央病院)及び世田谷保健所

(3) 実施機関

感染症指定医療機関(自衛隊中央病院)、世田谷保健所、民間救急事業者、都

2 訓練の目的

新型インフルエンザ都内発生早期における、保健所や医療機関等の役割や動きについて演習を行い、関係機関同士の業務調整フロー及び調整内容を明確にし、新型インフルエンザ等発生時の対応力を向上させる。

3 患者の概要

患者A(夫):59歳男性。発生国から帰宅後に発熱、本人から世田谷保健所新型インフルエンザ相談センターに連絡があり入院

患者B(妻):55歳女性。発生国から帰宅後に発熱、本人から世田谷保健所新型インフルエンザ相談センターに連絡があり入院

4 訓練の流れ

【午前】情報伝達訓練

世田谷保健所にて保健所及び都職員が集合し、自衛隊中央病院と実際の電話を使用して机上訓練を実施。患者が世田谷保健所新型インフルエンザ相談センターに相談の電話を入れたところから、入院先選定、患者移送、検体採取、確定診断までの対応について確認。

【午後】患者搬送訓練

自衛隊中央病院にて患者搬送訓練を実施。世田谷保健所から患者搬送の依頼を受け、病院内で対策本部会議を開催。その後、民間救急事業者による自宅から病院への搬送、受け入れ後の病室での処置、行政検体の受け渡し等を確認した。

訓練実施風景



情報伝達訓練(病院側)



情報伝達訓練(保健所側)



病院内対策本部会議



感染症指定医療機関へ搬送
(民間救急車両)



病室内での処置



行政検体の受け渡し

訓練の振り返りで指摘された事項

【情報伝達訓練】

- コロナ禍以降、オンライン会議も色々な手段でできており、顔をみながら調整できることから本番でも活用できると良いと思料(世田谷保健所)
- 電話のやり取りだけでは繋がらないこと、漏れがでるためフォーマット等を活用して調整することで情報を正確に伝えることが重要(都)

【患者搬送訓練】

- コロナ禍で感染症の治療において人工呼吸器や透析などの維持療法が重要との学びを生かした訓練であり当院でも参考としたい。
- 対策本部の報告内容が非常にまとまっており、当院でも平時からしっかりとまとめて報告できるよう院内で情報共有したい。(看護師)
- 物品の配置についても事前に決めておいたほうが良い。処置がし辛く危ない場面もあった。(医師)
- ストレッチャーを急いで清拭していたが接触感染の観点から急がずしっかりと拭いた方が良い。(看護師)
- ガウンを脱ぐタイミングがみな同じでゴミ箱がガウンで溢れたり、狭い空間で脱衣したりと汚染につながる場面があったのは注意を要する。(看護師)
- 使い慣れないストレッチャーの操作で危ない場面があった。PPEも病院で使用するものと違うと介助時にパニックとなることもあるため平時から保健所との連携が重要(看護師)

事例-2 令和6年度新型インフルエンザ患者発生時対応訓練(墨田区)【ブロック訓練】

訓練概要

1 訓練の日時・場所・実施機関

(1) 日時

令和6年12月24日(火曜日)午後1時30分から午後3時30分まで

(2) 場所

すみだ保健子育て総合支援センター 1階 多目的ホール

(3) 実施機関

感染症指定医療機関(東京都立墨東病院)、墨田区保健所、江東区保健所、江戸川保健所、都

2 訓練の目的

新型インフルエンザ都内発生時に備え、ブロック内の各機関が合同で訓練を実施することで、関係機関同士の役割分担や連絡体制の確認を行う。

3 患者の概要(情報伝達訓練)

35歳男性、会社員で江東区在住。妻、小学生の子供一人と三人暮らし。
海外から帰国後に発熱及び咳嗽があり、江戸川区内の病院に待機している。
(その後情報伝達訓練の中で、入院先調整の結果、墨東病院へ入院となる)

4 訓練等の流れ

(1) 講義 ～感染症に対応できる社会の実現～【講義(20分) 質疑(5分)】

(国立感染症研究所感染症危機管理研究センター 危機管理総括研究官 関なおみ 先生)

(2) 検体採取訓練【30分】

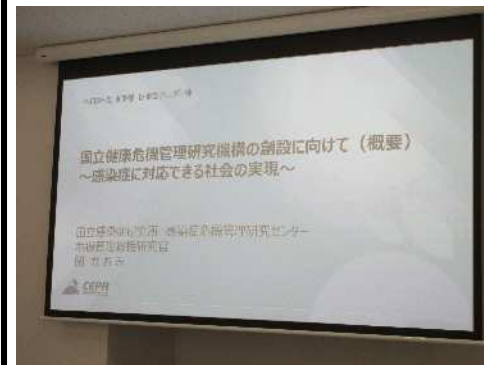
新型インフルエンザが国内で発生後、発熱外来が必要になった場合、すみだ保健子育て総合センターで発熱外来を行う事を想定した訓練を実施。

陰圧テントを立ち上げ(墨田区保健所職員で事前に立ち上げ)、実際に必要なPPEを着用した上で、テント内で検体採取、行政検体の受け渡し、防護具脱衣等の訓練を行った。(スワブによる実際の検体採取は無し)

(3) 情報伝達訓練【35分】

各機関がプレイヤーとなり、一堂に会して情報伝達訓練を実施。病院から保健所に疑い患者を診察した旨の相談が入るところから、入院先の調整を経て確定診断に至るまでの流れを訓練した。

訓練実施風景



講義



陰圧テントの設営



検体採取訓練



防護具着脱



防護具着脱手順



情報伝達訓練

訓練の振り返りで指摘された事項

- 実際のケースをモデルにシナリオを作成していることで、想定にリアリティのある実践的な訓練になった。
- コロナ禍における特例的な対応ではなく、原則通りの対応について訓練を通して今一度確認したという点で意義があった。次回の訓練については1例目患者対応だけでなく、コロナ禍で問題が生じた場面の訓練を実施すると良い。
- 各組織の実際の電話等を使用して情報伝達訓練を実施することも有意義かと思われる。
- 管理職として各部署の役割分担を再確認できた。
- 健康安全研究センターでの検査結果が判明した際は、最初に診察した江戸川区の病院にも連絡を入れるべき。
- プレス対応に人手が必要になるため、プレス対応部隊と現場の対応部隊は分けた方が良い。
- 感染症発生時には、行政から医療機関等への連絡を早急に行う必要があるため、連絡手段のDX化等も含めて体制を整備する必要がある。